実践交流
中学国語

「使える」知識・技能にするために
～木村信子『未知へ』の実践を通して～

熊本県熊本大学教育学部附属中学校　田上　貴昭

一「使える」知識・技能にするために

知識・技能を身につけさせる授業を意識してきた。しかし、教えたはずの知識・技能を生徒はなかなか使いこなせない。

なぜか。二つの原因が考えられる。一つは、身につけた知識・技能を自覚化させていなかったということである。もう一つは、知識・技能の使い方（使う場面、使う順序、組み合わせ方）を教えていなかったということである。身につけた知識・技能を自覚化させ、使えるようにするために、知識・技能の「構造化」「振り返り」を位置づけた授業を行った。一人の生徒Aを中心に紹介する。

二　知識・技能を「構造化」する

『未知へ』（三省堂『現代の国語2』）のテキストに出会わせる前に、まず、今までに学習した知識・技能を「詩の読み解き方」という観点で構造的に図化させた。図にすることによって、今までの中で自分がどんな知識・技能を身につけてきたのか、どのように用いればよいのかを、構造的に再認識させることができた。

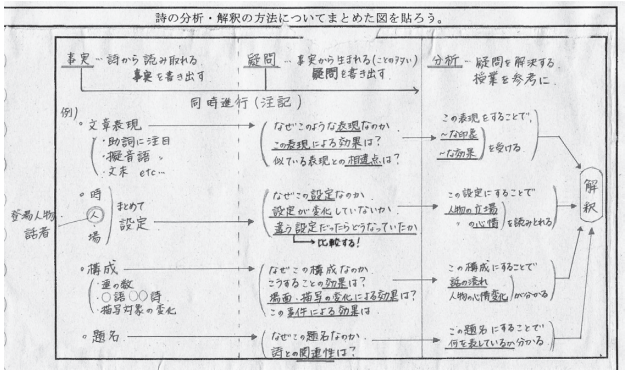

図１　生徒Ａが書いた「詩の読み解き方」

三　知識・技能を「使ってみる」

『未知へ』の音読指導の後、「詩の読み解き方」を使って、テキストに「考えたこと、気づいたこと、思ったこと」を書き込ませた。

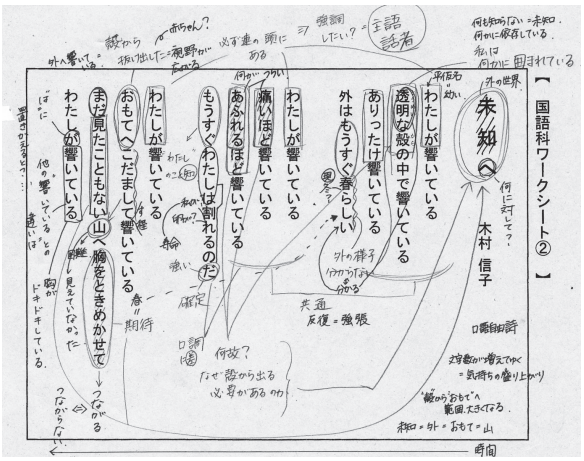

図２　生徒Ａの「書き込み」

（※図2にはその後の討論で気づいたことや、他者の意見なども書き込まれています。）

「詩の読み解き方」を用いることで、より多くの、より質の高い書き込みをすることができるようになった。

四　「わたし」は「割れた」のか？

「春」「山」「響いている」「割れる」などの抽象的な表現の意味を検討した後、次の発問で討論を行った。

「わたし」はもう「割れた」のか。

Aの最初の意見を紹介する。

わたしは割れたと考える。なぜなら、一〇行目に「おもてにこだまして」とあるからだ。この表現から「割れた」わたしが、現在進行形で響いていると思った。割れたばかりのわたしが、見たこともない山への期待を持っているとも考えられる。

この時点で、注目している根拠と「割れた」という結論はうまく結びついていない。その後の班討論の中で、そのことを指摘されたAは、意見を「割れていない」に変更している。

全体討論では一・二連の「透明な殻の中で」「ありったけ」「痛いほど」から、三連の「おもてへこだまして」「胸をときめかせて」という、響き方の表現（修飾語）の変化や、連の中の「わたしが響いている」という表現の位置（構造）の変化に着目した討論が行われた。

討論の後、最終的な自分の意見をまとめさせた。Aの意見は次のように変化している。

わたしはまだ割れていないと考えます。根拠は三つあります。まず、最後の行の「わたしが響いている」という表現に注目しました。この「未知へ」という詩の中でキーワードとなっているこの表現が詩の最後に出てくることで、強調の効果があると思いました。強調することで、強い思い、決意を表していると思います。この決意は「さあ、割れるぞ！」という決意だと思います。（中略）さらに「おもて」という言葉にも注目しました。「おもて」というからには逆の意味の「内」「中」という言葉が存在するということです。なので、私は「わたし」が「おもてへこだまする程」響いていると考えました。つまり、表へ出てはいないが、響いていることが表から分かるくらい強く響いているということです。（傍線は筆者）

討論の中で話題になった「わたしが響いている」の表現の位置を自分なりに取り入れたり（傍線a）、最初の意見で採り上げていた「おもてにこだまして」という根拠の扱い方を変えたり（傍線b）していることがわかる。

五　詩の読み解き方を「振り返る」

最後に、詩の「内容」についてではなく、討論で用いた「知識・技能の使い方」について振り返る活動を行った。班で話し合わせ、お互いの「使い方」の良いところを出し合わせた上で、文章でまとめさせた。Aの文章を紹介する。

私の場合、「①詩から事実を書き出す」「②事実から生まれる疑問を書き出す」「③分析して疑問を解決する」「④それらを詩の解釈につなげる」という流れで詩の分析・解釈を行います。①と②は、考えるのと同時進行で註記（テキストに書き込むこと）します。最初に事実を読みとるとき、「表現技法」「設定」「構成」「題名」などに注目すると自然に疑問が出てきます。「なぜ～なのか」「この～による効果は」などに着目します。（以下略）

文章化によって自分の「知識・技能の用い方」を振り返り、より確かにしていくことができた。

図化によって構造化し、課題解決に使ってみて、使い方を振り返ることで、知識・技能より「使える」ものになる。

たのうえ　たかあき　平成九年より熊本県公立小学校に、平成一二年より公立中学校に勤務。平成二一年より現任校勤務。